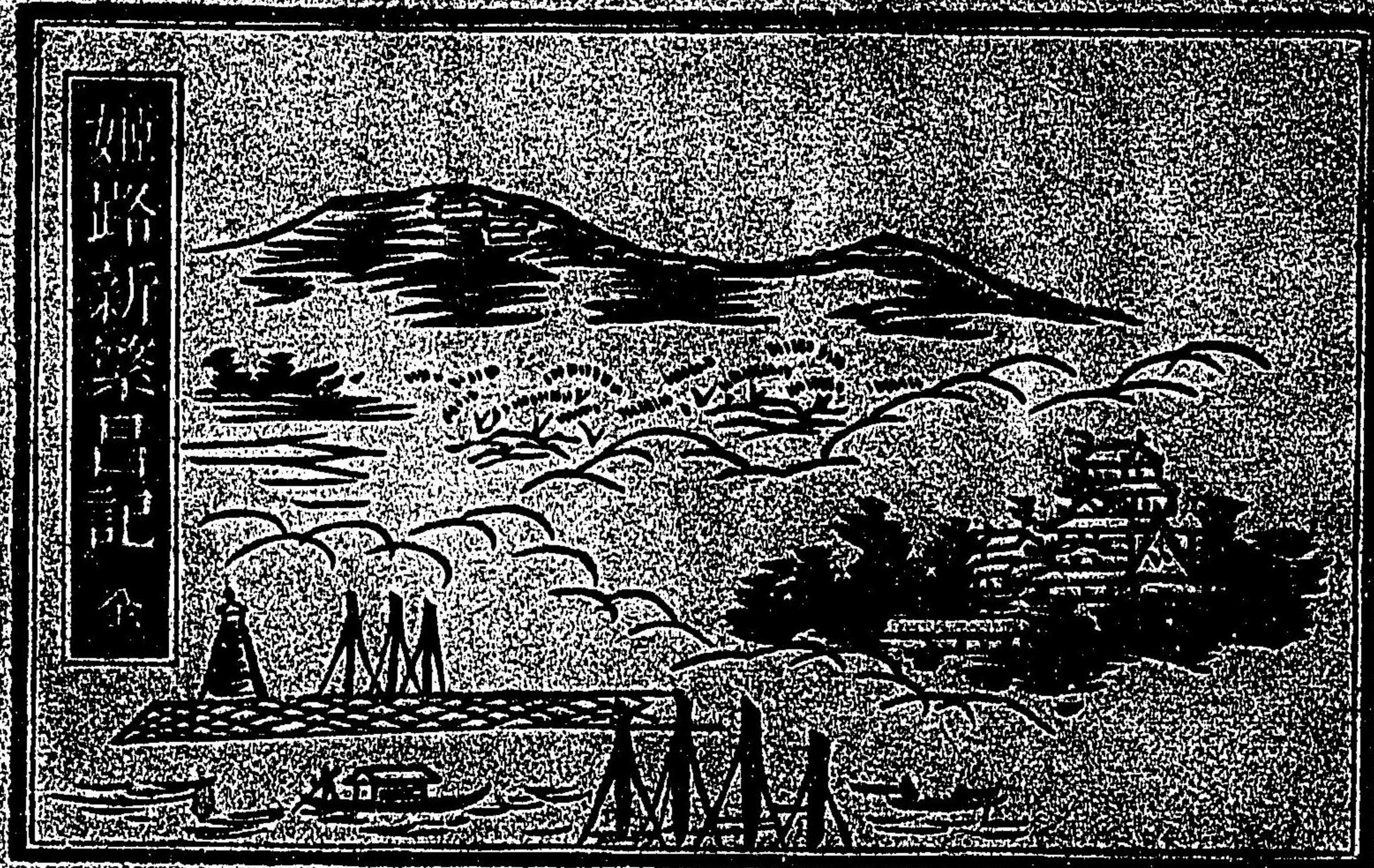


如路新景圖全



45

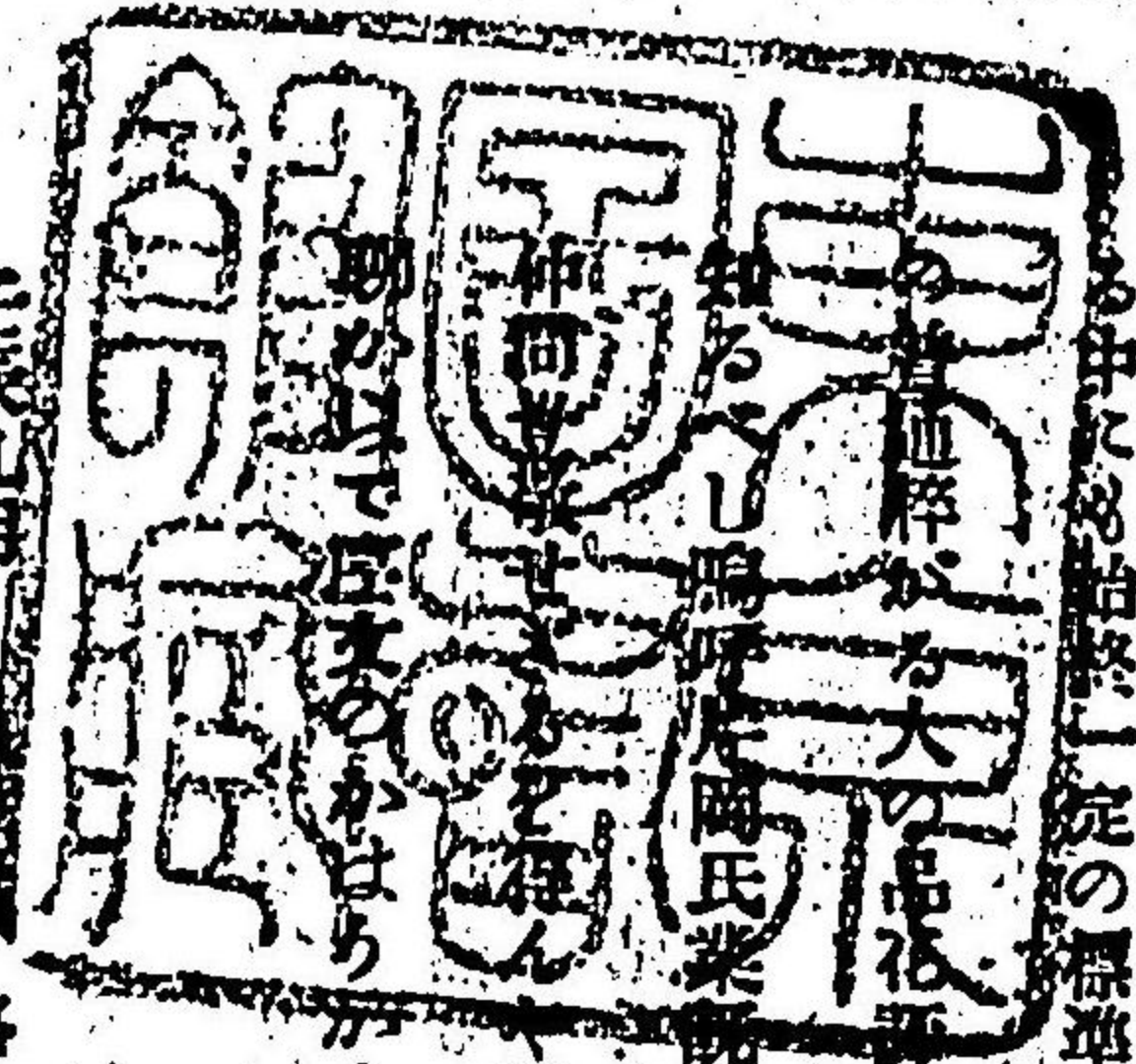
序

片岡凌雲散史姫路新繁昌記を著はさる此新繁昌記を
前代犬上太田魚谷の繁昌記とは大に異なり其小説体



に姫路の十二月の景況を描出したる間にサヨイ
と針代ある處天晴見上げたる氣概ある作と云はねば
あらせ又五十四の藝妓を残りせサソく品評した

中にも始終一定の標準を認めらるありされ亦記者
の筆趣なる大の品評月と大に其趣きの違へるを
知るべし嗚呼片岡氏業既に此概と此議とあり我等の
仲向きするも主権人
期がして匠木のかまじりかくみと以上
隨て此著作亦重すへまきり



壬辰九月

姫路 桃源社一同

叙

予は一昨年の秋、臂鉄砲に喰飽きしてから、キトノ姫路が五月蠅く此世が果敢なくなりし故去りて京都に至りしが至りて后加茂川の水で洗ひ上げた祇園や先斗町の美人を見魂がうつゝにあつて、おらは姫路の花鳥風月のるはまた夢にも思ひ出さざりし、さらば此程から俗用にて一寸うへり居ても思はぬやうに其景況も確張知らず、おの然るに今度片岡凌雲散史の物したる姫路新繁昌記を見て、是すれ居しるもさう思ひ出でかはりし、權もよく分り知らぬ美姫も接する如くに知られ得る、されどもこれまことに此書の賜物ぞと感し、さのもほり一言記すると爾り

廿五年九月

愛々散人

姫路新繁昌記

●目次

48 特 891 第一篇 姫路十二月

- 學校の新年
 - 白國の觀梅
 - 南陽の初午
 - 姫路驛の待合
 - 神谷の花祭
 - 温泉の梅雨
 - 船場川の納涼
 - 藥師山の觀月
 - 書寫山の車狩
 - 蘭磨の舟遊
 - 養氣座の演劇
 - 白鷺城の積雪
- 第二篇 藝妓評判記現在五拾四名不殘
- 第三篇
- ◎衆議院議員選舉有權者氏名
 - ◎所得納稅者 氏名

凌雲散史著

續姫路新繁昌記

(近日發行)

◎目次

- 第一篇 ●市行政 ○警察官 ○活民社 ○佛耶の論判 ○鐵道運動 ○會社の設員 ○學生の狀態等
- 第二篇 ●梅ヶ坪の十二時 ○娼妓評判記
- 第三篇 ●飲食店及料理屋一覽 ○旅人宿一覽 ○娼妓細見録

姫路新繁昌記

凡例

一此書は俄の思立にて魚谷楸次氏執筆の姫路繁昌記に倣ひ聊か趣向を換へて咄嗟の間よ起稿したる者されば隨て鹿南社撰の塵又ハ文字の書損等頗る多からん讀者幸に看過せよ

一前の姫路繁昌記は健脚する魚谷氏の執筆する上後閑山崎翁と云へる顔揃れ助力あり殊に美人の品評に至りては粹人の団体とも云ふべき桃源社の顧問たるあり加之南陽社、旅人宿、其他よりの補助もありしを以て完全なる出版を遂すを得たるも此書やこれに反し赤貧にして多忙ある著者が獨力にて一夜漬したるものされば其体裁記事共に前者およびばると違してれ著者が愧づる處あり

一姫路市具於け行政、警察、政況、宗教、學術、商會等の模様及び娼妓の品評細見等悉く本書中に網羅する心組にて既に草稿を卒業したれ共紙幅の都合により本書の續篇として不日別に公行するにせり

明治壬辰九月

凌雲散史片岡三千次誌

姫路新繁昌記

凌雲散史

片岡三千次著

第一編

姫路十二月

●雞は既よ歌ひ東天は既に紅に夜は全く引明けたれ共市内の家々は何れも門前を掃除し戸を開らくる音のきこへばこそ昨日の混雜に打て變りし今日の豊閑さ時々は寒前の冷る肌を刺せとも戸々の門松七五三傍りの宛ら春の心地ぞせらる羽織袴或はフラツクコートおと思ひくゝの禮服さて行かふ禮者の其中にも一きは目立ちて美々しきは陸軍將校と小學の女生徒あり此日や四方拜とて 聖上には朝まだきより宮廷よ於て天地神明を祀り國家の福祉を祈りましたとやかやされを各學校に於ても生徒を集めて拜賀の式を行ひ 聖上の御万歳を祝し奉るあり此儀式を初春中の最も嚴かに我等國民をして景仰の心あらまむるものぞかし抑も市内の學校は京日に縣立の中學市立の高等尋常の二小學あり福中に市立の尋常小學あり船場に私立崇徳學校あり何れも數百の至多きは千許の生徒を有し教師亦其人を得たれば文學算術理科の習育は發達して生徒は親を困らす迄に操練唱歌の体育に全くまで女子は色黒くして外足に歩み男子はオーガンを弾じて牝鹿鳴を誦め迄に修身齊家の徳育は善くして男生は女生の美惡を品し女生は教師の

指頭の香車あるを喜ぶ迄に至るまでに難有とも嬉し
共言「尽くさん様はあしとれも其善近頃は教員の風采
が其待遇の進みしと共に昔時の書生風の一變して紳士
風と化せし位故やば惜み各學校の心と廣き一室に御
眞影に對し奉り整列せる百十の生徒の最早七才を過ぎ
しもの「みされと男は男女の女と禮儀正しく席を別に
し君が代を唱歌する一番校長が恭しく捧げる勸語に最
敬禮をさし慇懃に其御教旨を耳より確かに聴聞せしが
心よは確かよさくいか否再び皇御國一曲を唱歌すオー
ガンの劇亮たる歌調の明々たるまじと「明らけく治ま
る樹世の反射かと思はれそ「愛國忠君の心の奮起さ
るゝを覺ふさらば此儀式を見たらんもの如何に一年に
一度より無き元旦とは云へ争せか泥酔して路頭に仆る
と迄に至るるげんやさの云へかゝる状あるが國家無事
の休徵歟めや唯せや先初春のと何地行きたりとて壽祝
ふ絃歌の涌けるされ新年の態なりけり

●姫路の北半里程の處に二の大梅林あり白國で云ひて攝
津の岡本に伯仲は梅林あり後に吉備公乃創始し係る素
護鳥尊を其頃に祀れる廣嶺山と聖徳太子開基の隨願寺
にて名ある増位山と連れる山脈を帯び前には雲際に聳
立せる白鷲城の巍々たる城望み幾千株の梅木花時に至

れば瓣柔積雪を欺き若香散郁里余に薫きされと年々集
る雅人隨客其數を知らず林間花多き處には假棚を設け
酒核を備へて客の至るを待つ。オッ寒む。寒むッて馬鹿
を東風が吹くのんだ。東風吹かば香起せよ梅の花ッて
東風が吹くとそれに伴れて香が来るヨ。オヤはんどに
チ香がすることン（鼻息を引く）。でも丹さんよ貰ッ
た麝香には及ばんだろ。嫌知りません。へいッ逆鱗に
ふれまじたか失敬々々併し卿の香袋乃公に呉れさいか
。折角ですけど。呉れさいとつのか。唯。何故。郎花ち
やんよ逃げさるるも。花ちやんで誰だ。エー地烈体打さ
升。嬢やんはこれよ困る誰に呉れたの。左様々々
妾の嬢やんでオ卿よセッ。欺きを升。觀梅に來ても
痴話狂するはすさすられた間同士他處の見る目と何と
やら此方の掛小屋の中の一連は今しも十二分の酔を尽
して互に洒落の眞最中中にも一入耳を貫く金切聲にて
歌ふ御所車はたしかに南陽屈指れ尤物と覺へたり。香
に迷ふチ。ン。ン。ン。ン。ン。よくあるまッ。さ。や昨日は
りかへた。何日も袖袂にあらぬでよ。なんや。破き三
味に。此垣三重が。黒鉄の。よくのる人やな。よく乗せぬ
女だの。遊ばし乗せすぎで大弱り。どうからでさい。
。と。と。のか知らん北さ。北さ。の。み。み。の上

のどけったさ地口さかにむがしむけはして。愈々悪い。君にした處が御互に。八釜しい東西々々。南北々々。チエー八釜しと云つたら四方のなひ奴等だ、

●此處は南陽とて戎町と西魚町とより伐立たる狹斜に橋所謂夜なき別天地にして井上、丸万、福島、狐、阪部、飯田、三龜、丸八、内海、鹿伏子、岩田、吉田、竹鶴、廣さんと云へる酒樓の客の出入のしげき竹鹿、中店、井上おと云へる檢番に掲籍せる數十の紅裙々往還は頗りある此處ばかりの金のかる木をとてる人のみかと疑はしむ常さへかくあるに今日は陰曆の初午なり迎鎮守の松若明神をばじめ三龜飯田井上丸八おとどの稻荷を祀れる家々は何れも盛んに祭儀を行ひ各々興を添ゆることなれば今二人の賑ひにて客の下駄音は、シロコドンの太鼓に私してそりる心も浮なつめや。ヨウ八公井上樓の初午は年々新奇を見立細工をやりやす。左様おその主人公が余程好事者の由だのらチツ。それに座敷も立派にして麗やかだし。大臣や勅任官の宿泊はあれど定まる筈ですチツ。だか丸八おと中々立派ですかチ。井上に亞さま此チと語りつ歩める祥天社會もおれば。オヤ邦野さん何處へいらしやるのッ通りぬけのさじませんませ

れに今日は丁度初午で赤い飯を拵へとりますから兎も角もまア。邦野さんく。君ちやんと呼で居ますよ。何たが八釜敷云ふチ人きくの悪い。こんち艶福子もあまは四疊半の座敷の障子をヒツンヤリメ切り臉をホッノリ櫻にし書生流の目鏡は膝前の小杯に譲り桃花の貞せる美人の爪弾に合して地音に心意氣を唱へる粹人あり彼處の樓上には數客が杯盤狼藉の間に三四の絃舞妓をして舞ひ弾をしつ飲みつ話ひつの大騒ぎ老妓のシツトリとひき出す三絃に伴れ起ちて赤き舞扇をひらく一個の舞妓は年はいまだ二七をすぎず腰から下は生れた時酔で煮た者か但しは角平が生き變た者かヌヲリメナロとした處は何ヶ借春風に吹かるく柳ヒラリと翻る扇と恰も菜種花蝶振袖の長々しき装のさばき迦陵の櫻を筭するよ似たり姿で舞は紀の國とやらん云ふものにやまさしに了らんとする時。稻荷につまききたの一句あり野母らしき一人の客陸きて曰。ドンもチイ初午の晩に稻荷よつまられたとは咄々

●上寺町円光寺の糸櫻物社内招魂社の山櫻は既に満開しぬ好季節寒くは固より無く又暑くはな好時候空は一天の白雲もなく久方の光り長閑けさのする時に遊むでは一年の内何日かまたとそいろ遊情の興奮するもの

はこれ陰曆の卯日八日とて該管の祭日にて花より團子を賞すあるに此學生はかゝる菜種ケイなどを賞するものされどその前の如き庇理屈を云ふされ菅筋の氏子にして今日の祭日を祝せる中に龍万樓と云ふ青樓あり神谷橋元町として緋紳貴顯殊に兵庫縣高等官のよく來泊する所にして好ホテルありこれまた上戸あれば團子からで生酢の方を進みしが一妓に扶けられて龍万の門を出づる一紳士まさに車に打乗らんとし主婦送り出でし。且那大水から此方道路が大變荒れ枯した車ガガツさまして御大儀でしよと何卒屢々御來駕を。紳士は鷹揚に。ナニ道位ッ屢々来るよ。唯難有ムり升。道路もナ縣會々馬鹿を議決をしたりするもんだから早速に修復か出來ンて。主婦の何にも分らぬ乍らにアツ左様でムり升。語れる内に妓は老實な紳士の持物を一括し。御免。と云ひてヒナリ紳士の傍らに乗り移れば紳士は如何にしけん妓は聲として。御前お嫌です。フ、フ、フ。左様から車夫さん頼み升。

●梅雨に入りてから日々に小休みさへさき降雨濕氣に物の手觸り悪しく殊に農家の插秧の時分とて商法は一向開かれな家は戸を閉ぢて半障子半戸に商号を表するのみソウソウの香は臭さ悪しけれ共さう迎焚かせバ代呂物のかびを如何とせんア、内よばうり居ても面白くさく。と云つて遊ばんにも此雨天に面白き所はあし先鬼に角縮町の温泉にでも入つてア一寸身勝ひして内を出でしは小奇麗ある若紳商何れ花街では充分脂を絞られそうを貰かりかくて温泉に至れば。オッ水野はん日々困つたお天氣で。の主婦の挨拶をさう流し預けゆる石鹸をやり出し着物を格子の間に脱ぎそて、浴室に至りぬ此時や浴客恰も絶間にて今上りかけの人一名のみ水野一人湯に入りては出でくは入りさどし一人退屈らしく漆喰の上に盥を伏せこれに腰かけ乍ら四肢を磨ける折柄何れ水野はんや。はんは。おと云ひつ、入り來れるは二名唄女振りかへり見し水野の貞觀て莞爾一笑言さきや却て妙これぞこれ曲線の配合よき美術とや云ふからんか裸体の儘乍らも美中の美畫工の爲の好粉本あり。毎日來よるのソウソウ會はんチ。さうですトント御目にかゝりません卿の日々みへんじやありませんか。此節は折々欠勤するチツ。一緒に温まりましよ。サア入る。背流しよしよの水野はん。ソウソウ有い。そちらお向き奇麗な肌。戯ちや好かん。豆ちやんお前此間に米ちやんの背流したらどうだ。さうしてよか。ハアそちがし。オヤ誰か揚子引きに來とるさ。ソウソウ。はんは時々の

に中りよる様です。お蝶は不相變矢を拾ふてるの知
ろ。居るさい升ワ。随分風評のする女チツ。本真にいけ
ませんチツ。お前だいてあんまり浮氣びると此の娘の
様に新聞にかゝれるぞ。妾郎君の爲から假令新聞にか
ゝれたツて構やしません。其思召が本真から嬉しいか
そう思はれてる人に半日だけでもありて見たい。知り
ませぬ。これそんな悪戯すきこそぐつたい。水野はん非
常です。エツ山田君店笑に。吃驚しましたワ。

●姫路市を横切れる御萩川と云へるは市川の支流にして
一ノ船場川と稱し船場と内町との境界たり巾廣からね
とも水深からね共瀬早く流れ清くして六個の架橋あり
大ニ市内の風致を添も夏時乃至れば河畔に涼棚を設け
小舟を浮べて客の乗るに任かすさを夕景より橋上に
集る人多く随て氷水善哉の賣口盛き福中橋の欄干に
凭き絹手巾にて鼻より下を蔽ひ團扇遣ひせゑ年若き男
の色白く髪黒く其上浴衣の柄當世好の物にかゝれば一
見其意氣ある姫殺的の男なるを知り其數歩横の方に
ありて涼舟を眺むるが如き實は偷む様に此男の顔を
見る三四の少女のされ此近邊の商家か阿娘あるやし折
しもソコ吹く涼風に男の手巾のヒョウ／＼と二三間横へ
散り行けば一番大柄ある少女の直に追ひ行きて手早く

拾ひとり此方へ来らんとする男に、面はゆげに手渡
しとれば男は微笑を呈し。オヤ御親切に雖有娘は立木
のお嬢さんです。ハ、ハ、ちやんと御立寄下さいまし阿郎
の此邊で不斷お目にかゝり升子。と云ふも顔を眞紅に
してのはさし其羞然たる面容恰も櫻蕾の始めて雨をう
けて縦びんとするものゝ如し男は何か語らんとせる時
伴れの少女。お艶さんかへりましたよ。と云つ、早歩み
出すとどお艶はイト名残おまげに單筒ある會釋をさし
て去るを恍然として見送れる折しも。君何を益鎗して
居るのツ。オツ村井君豪氣に愉快です。紅裙隊の俄仗
たア。と云ふ玉へ森重へ。今夜は。ナニ森重の美味お
殿で一杯やろ。た先づ來玉へと云つたら。妓も言揃へ
て。井石さんお附合さ。と云ふ。

●姫路の西端み常り飾東郡役所のある地窟を薬師山と云
ふ山上おはお岩大神乃祠あり其下は西南殉難者れ紀念
碑船場本徳寺の説教場以下は支薬師如来粟嶋神等あり
東に姫路市を一目の中み望み北西は山脈蜿蜒連亘し南
に播磨の水天男爵を眺む誠とに絶景されと四時共に登
山する者多く就中五月上旬に於ける招魂祭は極め難
踏せる時とし其次を陰曆七月二十三夜の月待とす夜は

既に十二時を過ぎて一時に垂んとす満月は觀月客の遊
 に充されたり實に月待の夜とて月待貝にさゝめさ渡る
 聲は喧しく時に爪卵の三味さへ床しくさへて心増し
 折柄登り來れる二人は壯漢月觀かでらに日和見に來て
 明日の勝敗如何を豫卜せんとての登山とは其物言さま
 にて知らるめり此後より尾する如く來れる二番生少し
 く低聲にて。君前の男は定期師小しいが一體僕の考へ
 では取引所と市場とい全く異なつたもので定期米の賣
 買は取引所でさくばやれないと思つてゐるに姫路の現米
 の見取りと云ひ乍ら其實定期米一步を進めて云はゞ取
 る空米相場をやつとるにはさきやの感なきを得せ。夫
 れ然り或は然らん然れども。エライ然りつきだち。サイ
 レントノ。若し果して吾曹の所感の如くかれを空米相
 場さらしめば其筋黙過すまい既に其筋にして黙過せる
 以上は全くそでもあるまいか。
 君かき玉へ前の男が頻
 りに耳を傾けて御互の談話をよく様子だ聞が恐れし々
 々。連は男三と妓三四
 だ。お岩前畔の一屋の二階の二連は男三と妓三四
 とあるべきか君は張込んできよしの。大變もうけた
 から。馬鹿云ひ玉へ少々もけたつて何日又賭れかる分

るか。長力丸初見玉へわんさ勢で居ても瞬く間や
 ったけたから。だからもうけた時に驚るとよしの。ハ
 イそうです。おはりてみふさいす。だか考へて見ると冥
 加の悪るは商賣と誰か一日か二戸宛破産する者がかけ
 れば場は立行かぬから畢竟此節で日に千あると二千あ
 るら知らんがそれ丈の場の益と云ふもの。誰かの生産
 的の資本を不生産的に費消してしまふよるのだから。
 でもうきだけは市中なりに沽ぶが。サア世の人は皆其
 認見があるが其沽は畢竟不生産的の事柄で再度の生産
 力があつて即一度費したらうれつきりみある金だ。且
 那そんさ六ヶ敷る云はせよとつごり騒いだらどうです
 〇首の騒ごく。サアサ浮いたりく。スチヤラカチヤン
 〇。オヤッ月の光がてんな所迄。ヘンつまらなうこれ
 で頭もつきにけりッ。

●播州書寫山は姫路の西北に位し西國三十三番中の札所
 にして靈驗あらたまりとて參詣する者引もがらす法燈
 常に熾んきり此山は書寫松翠とて其の産地されば年々
 秋時に至れば羣狩に行くもの頗る多し雜木の葉は既に
 散り盡きて松杉のみ獨り蒼々として操の色を樂とて嗚呼
 ぶ世鹿の音は微かに響よひきて秋のわはれと一入ま
 しぬ霜に傲る楓樹未だ全く丹からぬ其萩の花の紅と反

映して其美云に許りおし松籟の風々は以て三絃に勝る
 べく澗水の潺湲は以て搦するに足る何物の俗輩か来り
 べ此雅致を汚すものぞとは云ふものゝ松籟を愛する女
 こり却て雅人の友おらんかを登阪の趾ちに呼吸苦しげ
 に来る男女の一連。兄さんおそつとぼつくとお歩きお
 さいナ足が痛くて堪りませんと。弱いとツタナ。一邊此
 處等で休んだらどうです。幾度休むらうのツ。今直に頂
 きに来るのら辛抱しさい。本堂は横手ある一隊は某裁
 縫師れ門生と見へ破瓜の少女二十許各鬼ごつことをす
 あれば迷藏するあり舞まへるわれは歌へ終わり誰よ遠
 慮も内所はきしを高らかに語るおと町行くときは嫌に
 秋波を流し尻を撫せお美人もてんき處へ来てからは一
 向早狼難殺風景の物あり。松林の中より出来れる二人。
 お福さんこれ御覧。オヤお花さんのおた御上手き。かん
 にたししそうです。オヤお花さん。よく似ています。オヤ。
 アラお花さん妙おとしやる。オヤ。お花さん。お何處
 らに生て居たんです。藪の中でまよ。お金さんは余程
 滑稽のお上手です。オヤ。お花さん。お何處までお
 何ですと。お花さん。オヤ。お花さん。お何處までお
 せん。失敬。皆今一度おの林へ入て見ましよ。まよ。生
 へん。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 へん。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。

伴し。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 辛度。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 行厨。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 つし。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 ようか。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 寸。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 える。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 松の。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。

●今宵は陰曆九月の十三夜。お花さん。お何處までお花さん。
 の浦の絶景をこの美人が共。お花さん。お何處までお花さん。
 せた。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 文の仲間。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 か。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 け。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 くれ。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 夕ぐれ。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 た。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 れ。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 たち。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 ぬ。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。
 ろ。お花さん。お何處までお花さん。お何處までお花さん。

バ観客必滅すといて其人の少さを知るべし名優の來るものありとも引幕又は大帳の贈物を受け若くは切落ば榮をうくるもの絶無希有あり故に近來名優遂に下り來るるさし惜つても生地のみさきこととも哉其舞上方の若手俳優の首筋の奇麗ある手足の香車なる体格の優柔あるを觀て轉た恍惚とし或は金錢物件を寄せて一片の春心を買ひ或は一本の差込を貰つて向畑が動八等に叙せられしより今は喜ぶもの頗る多く甚しきに至りては俳優飯飯の別を惜んで絶息する者あるに至る實に早言詔全斷の次第かしかし閑話はこれで休憩して一昨十四日からの惣社の例祭と云ふ此近邊での大市を當込にして芝居狂言安からぬ能樂を見ず共神輿の還幸を拜せしとて此休日に芝居見でやわと發氣座ははり裂く程の大入中にも目立つは東の棧敷の一群の紅裙に二三の若紳士類被りて荷の骨をせりり乍ら花買ふた妓の俳優の恍惚話を聽聞すると云ふ程の極端には少し足らぬと先づ々々其位の處今しと妓輩は櫛の紐をフツンと絶りしも知らずで一心不亂に舞台の俳優のみ見つめ居ぬ近隣の棧敷は何か焼臭さまで演技も見せに立たり居たりの大騒ぎされとも其場に元來物焚け居らねど心のかかりでさらねをいへ何處だるとキョロ／＼たり折角此方の一妓がア

ッ、ッ、と絶叫一聲朋輩は絶倒且的は捧復近棒の人吃驚した大きき聲しかし火元が知れて安心した。随分呆氣た口味の上の吸殻に氣づかんで。隣で大騒ぎして尋ねて居るのに。時ふ舞台には何外題にや舞台キリ、と廻れば黒屏の上に見越松の道具立一伎撃折しつ、呼曰。火の要領々々々々々々々々

●姫路の白鷺城は元豐臣秀吉公西の方毛利氏と捻り合戦あせる時黒田如水の水繩にて築きしものにくり日本第一と稱すとかや郭内は今歩兵第十聯隊の營所となり士族家敷の悉くとり拂われて練兵場とさひ廣漠たる野原とある天主の西北に旅團本部あり當時の旅團長は少將川村景明氏にして聯隊長は大佐高井敬義氏あるが厳正に風紀を維持し軍紀を訓練さるゝにより千百の兵士宛ら手足の如くあり實にや御國守る身は民は免れ得ぬ務とは云へ九夏三伏の暑日にも八寒極冷の寒天にも氣をつけ歩めの号令を奉りて振られ蹴られつ操練をさす彼れ皆父母あり親族あり家にありては國家の良民たり出でく兵とありては如何あれはかく蛆虫全然なるさは云へらくあらで軍隊の組織もとあらば叶々軍備の社會にまくてあらぬ者されば一軍一方に帥方伯連帥たる人々兵士たる民は陛下が最愛の赤兒にして帝國の

公民たり兵はかれらの父兄親族が生命財産を保護せるの上よりして必要たり汝は此兵をして烏合の衆たらしめめんや爲に在るをを肥愚せんこと万望に堪へずトッコノ話頭が横道へ流れ込んだかさることは如何でもよし此白鷺城は古昔は鷺の數千とさく集り居るを以て此名ありしとかや其風景思ひやらるそれを移してか否知らね共當時は白聖もて天主の瓦を堅められは恰も白鷺の群主せるかと凝ふばかり此日は昨日は夕方より降りしきりたる大雪の積りて今朝の旭日の光線閣上に反射したる景色何ともかん共云ふ様さし雪の朝の暖ければ窓社内なる五階の上から黄雞を煮ながら此銀世界を瞰下せる風流人あり合手は勿論南陽の尤物大分深き中らしいとは階婢が銚子を運びのの咄。どうもかう見た景色は大變なものだチ。そうですチ御天主に積つてチ雪から周囲の樹木の白い處さんざ書にかいた様です近年珍らしく積つて割に早く止んだチ。ハイタペいつた時分の積りさんざ寒氣さもンで比からツィやますさと思ひました。梅どんが飯へた後床に入つてらふでもガザリノと枕に響く音がして。若しやそれかと寧ろせよ。と思ふても乃公が居るもの故にけさくて弱つたるチ。オヤ嫌です耶こそ妾が居ましたから。本真に卿

と云ふ戀しき人は罪深くよ。妾たつてつらい命はあつくはさるのでせけれとチさくも誕乃種さる痴話の間に日は漸く昇り雪の追々釋け喇叭の音のきこもれや兵士の早伍をまして出でぬ。オヤ長居した最飯ろ、雪解けて道が泥まん間に歸りましょか。話の残りは。またでか。のこたにして

第二編 藝妓評判記

竹鹿店 勝龍 三木ヒヨん 二十五年

こまを姫路に於ける意氣藝妓の親玉とす當時姫猫の中勝
龍程生粹ある者あらざるべし容貌風采は今更云ふの要さ
し妓を以て大坂の俳優に比ぶればるれは片岡我童の如
き歟婀娜ばき中に分別ありヒヨロ／＼乎ある中に概あり
而して宴席の幹旋に於て其老功あるを知り一曲の演技を
聴きて其精熟を知る呼々技きくんは姫猫と粹者なしと
云ッても大事さし併し乍ら一つだけ評者の杞憂する者は
鹿を逐ふ者は山をみせとかで妓がアンマリ進取の念に忽
ち慮から或ハ借金を非常に嵩ましむるとさやの一事さ
り然れ共妓は定期米且手を出すとさけば其以て一攫千金
の利を得るとわれハ其心配は御無用に候と云はハ評者
はグーと云ふて己まんのみ

中店 小大 片田ゑい 二十五年

南陽中年増れ美人はと問はハ評者は第一に指を小大に屈
する者あり小大は色白瓜核顔にして生際濃く媚媚たる
姿色に充分の愛嬌を蓄へ殊に品格よく技藝亦拙と云ふ
にあらねば先づ御前上等勅任官と稱すべし尤物ありとす
小大妓ハ此儘才してメン／＼進まば南陽只一の妓たらん

と受負あり然れども妓としてかの情人にわいたい、
見たい、の熱度が下らぬ以上は自然宴席乃周旋鈍問
とありて以て聲價を墜するきと云へねばこれを服膺
して忘る勿れ

竹鹿店 玉八 福本つま 二十五年

顔おも長にて眼まるく而して糸切齒に愛わり性活潑にし
て堅き聲にてよく饒舌る余程面白き手取藝妓あり初め中
店に出で井上よりはり今竹鹿店に掲籍す丁度換番の一周
巡なり評者皆聞く妓ハ同時に多く(二人以上)の旦那を
とるもとささんで旦那と名のつく者は何時も一人まか無
しと(其交代あるは勿論?)然らむ此春とやらんに分婉し
たる兒の父は誰あるかよくとらりて定めて都合よかりし
からん併し乍ら世人をして認知せしめざりしは抑も憚り
處ありしよよるか聞きたきものにてこそ

中店 愛千代 廣門よね 二十四年

標致好からざれ共中店の古参にして十敷の若妓(丸八屋
形の)を隨便蕪陶しつゝあれば中々の勢力を有しぬるれ
に流石は塙敷されたるだけありて近頃大に實目も備はり
周旋余程うまく殊に堅いとの評判は嘘か實か知らねど最
も賛成する處第二流中屈指の絃妓ありと十茲に於て評者

は妓に望む處ありそは妓が丸八流の若妓を教育するや徒に客を騙し情を衝ふの術を以てせずして宜敷粹と俠と藝と愛を發達せしめんをこれ勉むべしと云ふにあり

竹鹿店 若春 咽まき 二十一年

眉薄く中高の顔にして一寸美人あり聲は火出けれども三絃は拙からず随分苦勞して來た身は由にて場數馴れた周旋は確かのもれあり借妓意氣地ある様で氣力あり其愛人を加護優遇する處さんと梅厩は仇吉もかくやと思ふ程の意氣地あり乍ころは一ツ硬骨校書は斷味見せてほしやと思ふ處をグンニヤリ氣力あしこれ評者の解しるぬ處にして又惜しむ處とす妓は其氣力を表す處を轉換しては如何即愛人を遇する時などは意地も俠氣も用ふやかく而して親方との干係若くは郎との斷縁の時力めて氣力をみせては如何さらん妓の履歴には一点の失敗なく又當年五月にはトク良妻たられしあるお

竹鹿店 又司 廣瀬まさ 二十年

或は日久司妓の施設する處宛如たる小勝勝龍ありと評者の勝龍の今日を以て我意に比したる前の通り然らば妓は即我當たるべきや(道理でよく皮肉を云ふ哩)我當たる大およし願る善く勝龍の別身たるこれ亦よし併し評者は或え恐る短小なる妓を以て幹長ある勝龍を學ぶ身幹既に其及ばざれと三寸働に於ても學で至らざる者あるささかを否學であらぬと相場の如さを學ぶささかを妓に記せし勝龍は情郎の爲に随分心と金銭費ひたることを妓に又記せしと虎をゑらきてあらすんは却て狗に類することを

中店 玉吉 桑田巳い 十八年

襟をのへたると共にマンと價値と引上げたりとはその春歌伯にて名高き京都祇園の小三妓の如し一年入きてから相場が貴りたればかり嫖致美にまで技藝熟せるにはあらされ共まゝ極にもあらず加之此頃の評判では人々あり機敏にして年に似合ぬ才力ありと評者は近日妓を聘せしとさければ此評判は當否の知らねとを公評果して間違おくんは實に敬服の外なく其進歩や賀すべきや

中店 春榮 竹中いる 二十年

眉濃き處へ近頃肉瘦せたるそんごから頗る險しき様見ゆる顔され共中々苦味ありて美人あり其上近頃大に澁皮の剥けて來たき酒席の周旋妙ありとす妓中々多情の由にて時父の知れぬ子を生んだとさへありしと聞ぬ而して其今の肉落ち色の青白きも元來の性質然りとは云る分燒の後一入目立出したとかや思ふに順血未だ全く復舊せ

ざるのされば此際最難最煩すべきは房事にあるに如何にせしよや「人間をやめよ」かと迄に世を果敢あたるには何でも面白い情事のあつたかあるかに相違なきナ

竹虎店 淺

龍

鹿谷やの

十八年

愛嬌ある顔あれども何だかンマリきし屁茶でかけれ共美人との無輪き！技藝周旋また上手でよし而して掲籍してから變化なし其代りに又ドエナイ飽聞もなきや云は甚しきげなし様あれども其實然れば仕方おしまつ姉妓の仕入一ツにてまだ如何様よでもあるのに相違なき

井上店 若

玉

森とめ

十八年

族籍は士族にまで本姓加藤されとよく川口の虎穴に入りて虎子を擒にせん容貌美しく殊に口残一寸歪める處命とりて三年の修業久しと云ぬにはあらざるに其ニヤケたる聲にてよく客を瞞着し去る技倆もよくまた誰れの御仕入にかゝりてかくの如きか或は云ふそは森の黒頭巾が然か操るありと成程左様かも分らん鬼ノ角全盛すと扱は近日落籍る由日出度と云ふの外おれれども森抱へのみさら若春の五月の様にあらねばよき

中店 愛

司

福山たま

十八年

各詮自稱と云ふ譯にもあるまじけれと艶麗なる容貌優美ある風采宛ら愛の司と云つて過言にあらず妓として聲の金切的あらんには最早申分はあるまじき然れ共今一ツ襲前 惘然(誤字) たる庇痕あるを恨むこれ真に玉に瑕と惜まざるをぞ但し此庇は蛇の足ではないが見た人は出世する由ナント茶町の米市に到る人一ペン試みては如何随分客取の藝妓です

竹虎店 若

縫

鹿谷小玉

十五年

これ亦愛らしき美良きや而して前者と別に優劣する處おれども其操行に至りては大分劣れりとす吁々若縫妓よ汝は何すれぞ其操行の不体裁多きや若米の 實妹と云へばそれを別み怪む譯ではあいがさは云へ女の價値を保有すべきは操行の高尙なるを第一とすればあの妓げ直何ですや人の噂すに至りては實に嘔吐を催さん許りかりてれぞまことに誠むべきものぞかし

中店 小

雪

山口りゆ

十七年

若詰妓の中にては前二妓に亞ぐ美容なれども時に大變汚く見るとあるは化粧の足らぬ時かすれバ差引した處では坐敷に出る時程の別嬪ではあからん此三四の連中は凡て抜藝は一向早不味者とするしそれ小望の猿股を恃んで

無禮をかひよ至りては實に憎みてもさほ余りある仕打と云はざるを得ず小雪妓以後つとしめ

中店 千代香

尾上かつ 十七年

色白からま目また大にして奥きれどもよき顔ありと十妓曾て嬢様風あり昔忍をれて床しふとど持て離さしと暫時神戸に出稼し外人に交際などして來てから大に品位を下せし機覺也ア、惜しきとしてけりと悔んでも役たらず

井上店 小

福

英賀みき 十八年

これ亦初心ある若妓あれども随分機敏にたたまはせ又舌鋒中々鋭ければ前途大に望みある如し好老妓の薰陶を程よくうけさせたき者ありもしさもなくして此儘勝手に成長せば或は陥てトシメ莫運肌もあるなも知まれば妓それでは困るからせんかと評者も色々の心配大儀々々

竹鹿店 米

豊

岡本あつる 十八年

大柄のそれだから年より二ツ三ツ老けて見ゆるが妓自身に道ふ如く甘酒屋の看板的面相なりだがよくニタリと笑ふ顔却て愛らしきと矢張福相の所以あるか技藝周旋はア余念なく精出して勉勵すべし其間よは上達する哩

竹鹿店 若

菊

阪部つね 十六年

是亦アモ遊妓の一人にて容貞より技倆よりまだ龍野
へ修業に出して見てもトント場馴ても来すてんき代呂物
は宗粟山崎が適當なりと思へど却て神戸に鞍換の約束と
一のひしとら幸福と云ふべし

竹鹿店 久 辰

馬場はま 十九年

短小美人久司波の妹分と云へば定めて全妓に肖たるべく
随てまた勝龍よ似た姿と云ふか年齢と共に經驗も若ければ
今では可もさく不可もさき美人要三々代呂物あり

竹鹿店 米 玉

飯田ふさ 十七年

先達而南陽に有名なりし前米玉の名を襲ひて掲籍す必ず
や纏て大盛たるべき胸舞あるならん妓の今の有様や丁
度お千代が若干代と呼びたりし頃の前米玉の初心ありし
によく似たり妓は前米玉をまきんでかの處女かりし米玉
のありにも似合ぬトエライ手取とあり落籍されては氣隨
氣儘の仕放題も愛想づかしてかへり直に掲籍ては再び他
へ落籍さき又々氣隨氣儘をやりつめ今や旦那の愛想を全
く尽き果てん迄に運べる如きものとある勿れ呉々も訓
へおくそ儲かく云ふは云ふたものゝ居らぬ阪部とて
そ妓の品評の爲に引合にかゝれてさぞの迷惑ならんお
きの遊様

中店久 龍

松下すへ
十五年

千代香と全屋形にしてまた千代香に髣髴たる美人され共
知識は大分千代香に勝り中々伶俐ありとぞ評者はいよた
妓を聘せざれば其實否は知らず技藝周旋は年だけありと

竹鹿店 龜

龍

岡本小たけ
十六年

散髪の時分方は姿色の稍劣りし様思はる蓋し結髪の不
移りある相にやまた肉肥へ目の細なりし爲にや妓中々腕白
者ありし近日は如何水掲は一回済みし頃は概して溫柔
らしく引込勝の習われ妓も矢張其通りや否

中店二 龍

伊木龍江
二十七年

短小され共標致別に醜からを聲細けれどるメリハリあり
三絛亦拙からず中詰のヤケ舞妓にして酒席の周旋頗る巧
まり其上四十八手の熟練舞妓にして如何されは斯程迄も
研究の届きしと疑ふ者さへあるとさくそは履歴書に就
かぞ分らる評者は知れどぞ特別の仁慈を以て明言せ此
要するに中店中れ尤物あり

中店千代司

玉野たま
十三年

可憐らしき舞子あり男帯せる舞子は今では妓一人されば

可愛がッてやりて焼芋や南瓜漬買ふて空りて可那り併し
成長乃后美人たるべきか否やは今日の面相よりしては保
証の限にあらぬ

竹虎店 お千代 貞殿えん 三十一年

昔加賀ふか千代と云女あり面顔醜く風采悪かりしも文筆
の才に長け俳借の道に詳しきをもて其名今に芳し此お千
代妓は面良は美にして品格よけれ、同名とは云へ加賀の
か千代と全一の論ではなし而して彼の和學に此は漢學と
學派に異りはあれども其文墨のたしきみ深く才藝の人に
勝れたる点は同名とけに全一あり妓の既ふ加賀のお千代
に優点と全点を有す然らば即其芳名の後世に傳へる蓋し
加賀のお千代の比にあらざるべし歟さり乍ら加賀のお千
代は獨り文字のみならず最女に貴むべき者ありしかり妓
は果して有之や否其一旦落籍せし身の狂花するに至りし
を思へば或はそれ無うらんやれ水たまらまば月支宿りぬ
ぞかききと、オツら評者が妓を論ふも畢竟技がさしてみ
一ツろくにかけぬ妓輩と群居して居くも超然唐本を播く
を意らぬ高尚者所に愛で、あり

竹虎店 春之助 阪部きと 十五年

春之助の南陽に在る間は美人が春之助か春之助が美人か
 と云はざるまい而して春之助の長所は此美と云ふ外に
 かし此程本花にありてよりは其長所の範圍を狭めて愈々
 美と云ふだけに止まれり全体姫路は本花の妓は必ず三絃
 を携むしむとも必ずしも然る必ず要さざる試みに京
 都祇園などみどり見よ半玉とか七分との云ふものねし舞
 子も皆本花にして又十七八の舞子もありさらば春之助や
 雛籠の如きは本花にありしとて依然鼓吹舞扇と赤手帕と
 を位擧へしめをよし何も六玉にひけさせぬ三絃を持た
 して客を阿旁らしがらし妓供に恥かすふいと及むと思
 ふ子方の主人方如何も思召をこれはしたり春之助の品評
 にトシメ議論を

中店若

雪

吉積まで

十七年

雪司の妹分と云へば定めて全妓の教育をうけ居るるべ
 きみ一向温和にして洒落ぬはまご場敷が重なるぬものだ
 からろれ迄に皮のむけて来て居らぬにやはた元來てんき
 質のか容顔は別に醜からず

竹苑店勝

勇

鬼頭つら

十五年

甚しき美人にあられれどもまたさして屁茶ふはあし技倆
 は何を云ふても年が年だらう手若さも無理あらぬ清元に

至りてはお師匠さんの娘子だけありて流石の親の仕入手
に入つた確かき者ありと云へどもうは大會に於て一般に
公評あらん評者が見識を録するに及ばず

中店歌

榮

楠 たま
十六年

歌榮以下れ妓はみな丸八の愛吉が大阪へ退耕せし代りに
どれ込み來りて大阪仕入の代呂物とす倍妓の技藝周旋は
別に評せん様なく容貞亦ヨイ加減と云つて可あり

中店歌

司

大竹たつ
廿二年

妓は歌榮の姉分に位するごけありて少しく前妓に優る處
ある如しこれ共矢張ヨイ加減の名は免れ得ぬ代呂物とす

中店歌

司

三好あし
廿一年

其技術は歌司とよき相僕あり容貞は光源寺前の温泉の娘
あかると云ふに似たりと云へり眉と共に口は長さが大欠
点とす

竹鹿店

若 力

奥田つね
廿四年

容貌音調ともに富子によく似て丸八抱への最近輸入品の
組中にては第一れ手とりとす此妓は今も勢力を有するよ
至るべし何を云つても揚籍日尙淺く愛千代の下風よ在る

間は愉快な運動も出来るべし

中店 福 勇 吉田めく 十八年

これも早ユイ加減連の一人とす妓の全体如何なる心懸で居るにや則吉とか云ふ妓の先日脱走したるをばふ助たりとさく今既に脱走の従犯をやる位からオツ、ケ主犯とあるとわりぬん悪いぞく心入かへく

竹鹿店 淺 司 荒木むめ 廿二年

色の淺黒さ最ナット垢ぬけのせぬ様か美人ありさらば聲もまだ調子は定まらままた三絃も撥離れよくきく精出して浴に入つて磨きたて又坐敷を律義に勉めよつたら段々進歩して来て若米や若干代位にはあがべし益し類が若米によく似て廣さ故にかく云ふはあし

竹鹿店 長 吉 吉村とぞ 廿一年

芝居も落語かの丁稚にさも似たる妙き名をつけし者あり流石は名だけに色少々黒くそしてキツトしたと云へばよしの實は優しくさ顔つまで又風采もトント在所臭さ質朴さ處わり熱心に働きてさへ居れば技藝周旋共に練れても来るし姿勢も追々花柳風にあるべいまづ今の内は勉強が肝腎此儘では山崎行を免れせ

竹鹿店 一 六 長濱むめ 十九年

顔面さ方丈高からい寧ろ低さ方とコ一冒頭にかくと行旅人死亡廣告の様で延喜でもさいが其實は然り借妓は其名の如くノイで好さ旦那を喰へんと心がけつゝあると奇特とぞと云ふてよま「や妓交際ある人に向ひては熱心に「旦那浮氣まきまき」云ふ由實に親切と云ふ可しきにして此赤心ある以上は定めてぐく可愛らげくとあらんと思へ共實際可愛がりてはホッ少さしと云ふ何故かしら

中店 邦 子 堀尾つる 十八年

前の若縫が評語中最後の「誠言は妓にも亦適用する要あり而して妓にはあは「一ツ訓誡すへきことあり全体妓は別に悪まれ性にさき様思に如何にしてや先輩の妓お疎せらるゝと云ふそれ妓は流行妓たるや客の愛をつまぐにあるや勿論あれども然れ共先輩の引立きくんば決して能はず然らば後進の妓は宜しく注意勤勉して老妓の引立をえんるを勉むべしとは云へ先輩は阿諛せよと進むにあらざるあり妓よ此訓令を服膺せば人望をえんと受合あり

中店 八重子 尾上とく 十九年

妓は余程金持と見へ借銭一文もあしと云へ「ヤサカ」は鬼

に角氣樂き身には相違はるまじ耳の少々違ふを憾とすも
ども其他に別に欠点とてあしきる代りに又長所を酒を
よく飲む位が關の山なり色は黒からねどもめ細くて奇
麗な質なり但し別びんであし

竹鹿店 千代松

楠 ちか
廿二年

華麗なる顔にして頗る付れ別嬪それとも腰から下殊に装
の邊の風采悪くこれは舞の氣がさき故にや或は又よく横
にありつけたのでかくありしかマヤカ横にありつめまど
てろんさるにふる理もさし妓は一時神戸福原に美媚れ名
高かりしの間もさく下姫し此名を以て中店に掲籍し昔一
イヤ此間迄とつゝ杵束だけによく轉ぶと云はれてハ此面
がと謹み居るときよしその爲にかドツたか割に不全盛
にて一旦廢業したれと矢張藝妓程旨の商賣はさきと見へ
て再び掲籍したりとは何と云ッてよきか

中店 一 松

母谷芳松
廿四年

色黒き不別嬪にしてまた技藝さ一只微醺に乗ハ何やらく
さ然と頬をいよく紅し岡山さまりにて饒舌る處余程可
笑く捧腹したへき妓はよく天地金ノ神を信仰する由お鐵
のほしさの立願あるのか或は又トントコンシンお客を引
寄せはしやの立願あるにや金はしけれハ働くのよしさり

さて腰は此上働かすべのらす色の出来るを頼まん心から
神様よもや頼着あるまじらんか不正の信心せんよりや
コンシン要の三粒練磨の花の露でも持つて日に十邊も沐浴
して寝たてたら其方却て所得の上には利益あるべし

竹鹿店 久 梅

雲出ぬ
廿一年

標致可かり美にして風采亦よろましく垢脱のした質ありた
い歌ふ聲の少しく低さを憾みとす或は曰く此低聲やハニ
調子返隠さんか爲ありとさて妓は中々情事の多き女だと
云ふ風評あり悪口と云ふ可し(チイ久梅さん)蓋し人も
より情事あるべし然れ共間夫の恨むべき者あると浦里の
雲中に松に纏られ乍ら禿の懺悔によりて明らあり妓や
これを知るらんさわき身の借金で償ひ呉れし恩人さど決
して踏み附にしては勿体なき冥加知らせと醜れん此醜を
免を得て後ハ勤めの憂辭しは妓のほこり任せ妓のさき
んど欲する處は任して可かり評者は只澗を流し指を喰へ
て黙過せんのみ

竹鹿店 若 米

高田しめう
廿三年

もと赤穂煎餅屋の娘にして全地に於て既に一寸艶事あり
其后龍野に久梅と名乗と技籍掲げて又々十二分の艶事
あり而して常磐姫路に來てから又々多分の艶事あり早多

艶あるとは非審ありと云はれ、妓色は少しく黒けれ共愛嬌ある
顔にて艶事の多き劇には聲もよく振れ舞ふ由技藝を知ら
す

井上店 若干代

三付せし
廿二年

若来と既し其修業地を全しくし容貌も亦略相似艶事に至
りては實に兄たりと雖も弟たり難きを若干代とす若干代は
トめ龍野福三樓とやらに在りし當時淑女に風ありとて一
時姫路を評判されし時あるが色氣の爲に全地を喰詰め此
地に轉籍してから接し見れば何がさて何でもさう尋常
の材書にして僧侶を愛すると云ふ一点だけが普通妓座で
異されるのみ穴のしこ技藝拙くどりどけ三絃の音のハチ
ンクたるには實に閉口頓首の外なし思ふに撥を少しく
大にして重さのを用ゆればかくあるまじ

竹鹿店 梅

松

翰師あり
廿五年

色淺黒さふ多福形の美人にして笑面はよし顔の古き劇よ
一向勢力ありそれも其當さ早半々凡々ト長所のなき
藝妓すればなり併三年が年故持た男はんの数は定めて多
からん然れども面白さるん聞も餘り耳にせず可もあふ不
可もさく沈香も焚かせば尻も放らぬ的唄女あり

中店 うのき

佐野うの
廿八年

たしかに見の二三人を生みつらん評者は妓の地方でも大
失策はあしむる居れ共言ふに忍びさればあはれ兼せず
妓容顔美きふされ共年古きだけには周旋は一寸もてゐるあり
若駒に次ぎて番番羽店の殘黨中の古る顔されや交際ひる
く知已亦衆くそれ故妓を口は可きりかゝると云ふ世乃中
に捨けし者なきを愛でた

中店 雪 司

金田のあり
廿一年

記性再現の規則に依る時ハ雪と云ふては白と云ふと思
ふ然らずんば反對に黒とか黒とか云ふと思ひ出すとそ
れかあはれか雪司と云ふ名をさけは直に色が黒いと云ふ
と思ひ出さるこれは妓一人色黒さにはあはれ共其處
が前言の心理學の規則の然らむむる處呼は是非もさや妓
近日滅切山坂の脱したるが不相變ケツと平と大笑と
又よく恍惚情さるるや否や技藝周旋は余程手練れて來た
るを覺ふも先ア姉はん様あり

中店 梅

梅

廣岡むめ
廿二年

先頃一寸柳原とやらに出稼なし居りしを以て姫路では暫
時中絶せし如く見ゆれども姫路に於ける經歷は中々古き
ものにて中店では愛の外妓より顔の古き者はあかるべし
聲は若作と云へり芝舞子の時分よりメット下れり腹前ハ

節の甲より年の功多年の出仕に老練の跡見も併し云ふ程勢力のさきは蓋し佳人果して不遇多きの或は又眞「佳入」ならざる故にかく不遇あるかそは暫く通人の判定に任さん

竹虎店 富子

杉山宛
廿四年

成る程交際して見ると如何にも老功らしき處は見れども名門屋大阪の松木舞臺をふんで來りし経験藝妓ありと云ふて見ると「君でもですか」れでと云ふと不満足之感なき能はせこれに答へる者ありしが「姫路の様さ處へ流れて來たのですか」と或は然らん妓容顔美さくされ其亦醜みならず技藝亦中の上と上の下の間とす要之上方仕入の物代さき「何か他に長所あらんか」とそは知らず

中店 種吉

木下はる
廿七年

古株の義太夫にして場馴れたれば第二流中の上等に位すべし尤物とす妓の容は何だか皺のある様見へて少々婆々呉れれども決して老いたるにあらざれば其年齢にて御承知あれさて當時の姫猫中義太夫は妓一人さき「如何に今の客筋の面喰ひばかりだ」と云つた處が中には頼杖の天狗連も登壇すれば妓さきよく口はかゝる由何と妓大奮發ヤツて當面流行の清元の向をばうて見ては如何

中店 若駒

村上よし
廿八年

舊音羽店に首領たりしよりいままは隠然として一小妓派の司令官たるも可笑し経験古きだけ小難口たるだけみ下におけぬ技倆あり艶事も曾て一兩度「エライ」とありしは現今は「ト」おき如し但し眞にさきの或は評者に知らし先ざるのそは知らず要するに幕の内の代物ありとす

竹鹿店 はる

武中こる
廿二年

容顏醜しと雖ども歌曲精練として勾當老熟せりこゝを以て頗る勢力あり多數の妹妓を薫育しつゝ竹鹿は威張る蓋し御尤なりとすもしるれ妓にして此上に音調を少しく朗らかふらしめ目驗を少しく上げ鼻柱を少しく何とかがしたらんよえ南陽無比の好妓たるべさか阿々

井上店 立吉

國廣かつ
廿九年

妓デボナンにして優しくきた妓あるが技藝の老熟せる幹旋の蒼勁なる点に至りては實よ早南陽第一とすと云つても別お差支なき様さでそのれでと後の三老妓が評者を枕や掖を以て闇の夜に打さにくるから一の字は當分預り置く妓此節と如何だか知らんが一時情人のありしも中々巧に立廻るを見入一すもこきと人に知らさうりしとさん

此技倆の深度ものこそ、
年序披露す様の風形ある鹿の子の中々不廉料理なかり

井上店 久 惠

岸本ひで 廿九年

色白く苦味なき顔よしして聲美に大柄にして風采わしくは
きし今より一昔前既に南陽に牛耳をとり居しが去る國
手に思はれ落籍して左國扇の身とありしも遇々持病乃起
ゆし為遂にかへり咲けることとはきりぬ技藝精熟にして
殊に歌舞伎の獨得の妙あり周旋老練にして應對最巧あり
これを以て中店の愛竹鹿の大吉と譽を併べて鼎立の姿を
志し南陽に朝權を争ふ亦真に以ゐる哉

竹苑店 大 吉

紀の本たけ 三十六年

聲揚かちにして容貌亦美ならずと雖とぞ自然に具備せる
態度に充分の老効を示し應對進退の間に流石は老姐たる
を表はす實にも竹鹿は隊長にしてまた姫猫の親玉たる價
値アラツキ居りぬ滑稽に巧よして洒落の妙技藝老練にし
て周旋に熟す少しく粹める人間快飲を試験人物の指を妓
に屈する豈恣然ならんや々、弄花を飯よりも愛する液病
とすもしそれある道理よりして主の浮名のたつかはと案
じるよしとせ去へ前門は閉鎖の嚴あるは南陽また妓を一

にして二三に位する者ありと云ふに至りては両手を擧げ
て稱ざるをある

中店 愛

山田あけ 三十八年

仰々たる肥満妓にして容貌は前妓と全しく美あらざれど
も三絃はもと庭訓耳かゝり遺憾なく丹練せり長の年月十
年一日の如く掲籍せるものから幹旋充分の熟練あり藝妓
ある名目の下に屬する定義から觀察を下して見ると當時
の姫猫中妓を以て第一お推さるるをあるす妓と大吉久惠と
を南陽の三老妓とす而して各其長所を異にす則三絃は妓
お屬し滑稽は大吉に屬し舞は久惠に屬せりとすこれによ
りて愛顧筋に亦種別あるも妙あり而して三絃中久惠は美
にして所天もし大吉はありと雖蘇木の近きと拜見するを
あるも只國會の傍聴筆記に其名あるのみ妓に至りて遂に然
らざること以て花散れに至りては大吉は久惠に妓は大吉に
及ばる蓋しまた已むをあるなり

衆議院議員選舉有權者人名

天神町 黒坂慶次郎
 國府寺村 三木庄太郎
 登丁町 村田新次郎
 大黒町 高井利平
 全 高井利一郎
 東魚町 田中忠七
 全 中安倉次
 全 小鹽長平
 全 岸本安次郎
 下寺町裏 中野長重
 元塩町 名倉五一郎
 全 山本藤七
 全 征倉吉兵衛
 全 中川喜平
 古二階町 五百旗頭喜八
 和泉町 神戶嘉平次
 全 神戶米藏
 東二階町 大谷圓次
 全 永田件正
 全 野中善五郎

全 木村博明
 中二階町 香山清五郎
 全 村上道常
 西二階町 那波三十郎
 東吳服町 羽岡彌太郎
 全 本庄助三郎
 全 永井彦藏
 全 本庄藤次
 全 長谷實淨
 磯町 馬場幸次郎
 全 尾上作平
 全 永井宗三郎
 福中町 濱本八次郎
 全 鎌谷爲次郎
 全 神村卯平
 全 浦上金一郎
 全 矢内重三郎
 全 矢内久七
 全 矢内治三郎
 本町 三木三郎
 坂元町 伊藤伊平

全	西魚町	後藤末吉
全	福中村	辻 豊次郎
全		古川嘉平
全		福井岩吉
全		三和作次
全	博勞町	平井善三郎
全		中安利兵衛
全		上野新七
全	相生町	谷村又二郎
全	米田町	木庄松次郎
全		岡 玖平
全		内波 玖七
全	龍野町一丁目	三宅純一
全		初井佐七郎
全		中村祐七
全		水田善次郎
全		三宅庄次郎
全三丁目		原 甚之助
全三丁目		廣岡善七
全		上村彌兵衛
全		井原庄平

全		井原庄藏
全	中村	中山次三郎
全		小林仲次郎
全		淺見半次郎
全	小姓町	井田交三郎
全	地内町	大谷勝彦
全		岡崎九平
全	吉田町	三浦利平
全	材木町	今井茂兵衛
全	南町	植田房太郎
全	直 養	横井金藏
全	五軒邸	弘田親厚
全		鈴木秀八
全	竹田町	上村次朗八
全		大野榮次
全	福本町	池内八五郎
全	健 町	兒嶋虎次郎
全	野里寺町	芥田利平次
全		濱野又次郎
全	坊主町	春山弟彦
全	大野町	尾上久三郎

威徳寺町 魚橋甚三郎
全 田中惣七

總計八拾三名

龍野町三丁目 井原庄平
全 廣岡善七
全 上村彌兵衛
全 大西嘉兵衛
全 井原庄藏
龍野町四丁目 飯田令庵
全 濱田熊次郎

所得納稅者

材木町 今井直次郎

全 今井茂兵衛

全 森 豐吉

稀山伏 今井尙賢

吉田町 井上清右衛門

全 三浦利平

龍野町一丁目 三宅純一

全 初井佐七郎

全 中村祐七

全 水田善次郎

全 藤本茂兵衛

全 岩城佐一郎

龍野町三丁目 原 甚之助

全 井原庄平

全 廣岡善七

全 上村彌兵衛

全 大西嘉兵衛

全 井原庄藏

龍野町四丁目 飯田令庵

全 濱田熊次郎

全	龍野町六丁目	佐藤為法
小姓町	吉中猪之吉	
井田堅藏		
米田町	岡玖平	
山本作次		
岡		
本庄松次郎		
冲尾治三郎		
吉田庄次郎		
本庄輔二		
淺見宅藏		
備前町	平井善三郎	
全	中安利兵衛	
全	富士本善平	
全	牛尾庄平	
全	三木房吉	
全	土野新七	
全	中谷岩藏	
全	岡崎貴三郎	
全	岡部龜吉	
全	黒田民藏	

全	地内町	岡崎九平
全	相生町	大谷勝珍
中	村	谷村又二郎
全	田中吉次郎	
全	中山治三郎	
福中村	鹿島武雄	
全	吉川嘉平	
全	森谷重吉	
全	坂元町	岩城滿次郎
全	川村景明	
全	荻田庄作	
全	伊田景夫	
全	吉田榮吉	
全	内田榮一	
全	三木三郎	
全	小室虎吉	
全	恒川由縁	
全	大田治郎左衛門	
全	利安文四郎	
全	田村金次郎	
全	東二階町	木村博明

全 本多平馬
 全 岡本長晴
 全 前川榮
 全 大島恒次郎
 全 池尻卷之助
 全 大竹品七郎
 全 海原隣平
 全 富士田省三
 全 服部之正
 全 岩田正吉
 全 飯田俊貞
 全 湍見歡八
 全 山崎慎三
 全 山口重夫
 全 河島至誠
 全 和泉町 神戶嘉平次
 全 茶町 神戶米藏
 全 大塚孫十郎
 全 真田吉平
 全 芦田廣次
 全 古二階町 五百旗頭米八

元 中川喜平

全 原 彌兵衛

全 名倉五一郎

全 本條萬次

全 黒田忠七

全 岡 元輔

全 魚橋彌惣七

全 山本佐一郎

全 東魚町 小塩長平

全 岸本万藏

全 渡邊 彪

全 小倉鈴之助

全 前波 仲尾

全 原 三男

全 大黒町 高井利平

全 井上 一

全 高井利一郎

全 後藤 彌平

全 下寺町 有留 清

全 桑野 弦藏

全 納 尚友

後撰散史著

姫路新繁昌記全書冊

定價拾五錢
賣價八錢五厘

賣捌

福中町

朝

榮

舎

今續新繁昌記發行致付ては大娼妓の品
御承知御承知の分は御投寄度候

姫路市
大工町

姫路新繁昌記發行所

まねき

姫路ステーションの東側
御辨當手輕安廉にて進調

全諸新聞廣告取次

井に文案の起草

大工町片岡三千次

洋酒並ラム子

東二階町
卸賣 小賣

野中商店

諸新聞雜誌大賣捌

福中町

朝

榮

舎

大阪毎日新聞
神戸日報

一手大賣捌

東魚町

近藤喜保

萬染物上繪

元福町
嶋仙

巖本仙三郎

淺雲散史著

姫路新繁昌記全壹册

定價拾五錢
賣價八錢五厘

賣 捌 福中町 朝 榮 舍

今昔新繁昌記 發行致付ては大工町片岡三千次の品
御承知 御投寄度候

姫路市 大工町 姫路新繁昌記發行所

まねき

姫路マテーションの東側
御辨當手輕安廉にて進調

全諸新聞廣告取次

并に文案の起草

大工町 片岡三千次

洋酒並ラム子 東二階町 野中商店

諸新聞雜誌大賣捌

福中町 朝 榮 舍

大阪毎日新聞 神戸日報 一手大賣捌 東魚町 近藤喜保

萬染物上繪 元盛町 嶋仙 巖本仙三郎

一	行	脱	正
二	五	下廿四字衍	
三	四	一六	
四	五	一六	
五	六	一六	
六	七	一六	
七	八	一六	
八	九	一六	
九	一〇	一六	
一〇	一一	一六	
一一	一二	一六	
一二	一三	一六	
一三	一四	一六	
一四	一五	一六	
一五	一六	一六	
一六	一七	一六	
一七	一八	一六	
一八	一九	一六	
一九	二〇	一六	
二〇	二一	一六	
二一	二二	一六	
二二	二三	一六	
二三	二四	一六	
二四	二五	一六	
二五	二六	一六	
二六	二七	一六	
二七	二八	一六	
二八	二九	一六	
二九	三〇	一六	
三〇	三一	一六	
三一	三二	一六	
三二	三三	一六	
三三	三四	一六	
三四	三五	一六	
三五	三六	一六	
三六	三七	一六	
三七	三八	一六	
三八	三九	一六	
三九	四〇	一六	
四〇	四一	一六	
四一	四二	一六	
四二	四三	一六	
四三	四四	一六	
四四	四五	一六	
四五	四六	一六	
四六	四七	一六	
四七	四八	一六	
四八	四九	一六	
四九	五〇	一六	
五〇	五一	一六	
五一	五二	一六	
五二	五三	一六	
五三	五四	一六	
五四	五五	一六	
五五	五六	一六	
五六	五七	一六	
五七	五八	一六	
五八	五九	一六	
五九	六〇	一六	
六〇	六一	一六	
六一	六二	一六	
六二	六三	一六	
六三	六四	一六	
六四	六五	一六	
六五	六六	一六	
六六	六七	一六	
六七	六八	一六	
六八	六九	一六	
六九	七〇	一六	
七〇	七一	一六	
七一	七二	一六	
七二	七三	一六	
七三	七四	一六	
七四	七五	一六	
七五	七六	一六	
七六	七七	一六	
七七	七八	一六	
七八	七九	一六	
七九	八〇	一六	
八〇	八一	一六	
八一	八二	一六	
八二	八三	一六	
八三	八四	一六	
八四	八五	一六	
八五	八六	一六	
八六	八七	一六	
八七	八八	一六	
八八	八九	一六	
八九	九〇	一六	
九〇	九一	一六	
九一	九二	一六	
九二	九三	一六	
九三	九四	一六	
九四	九五	一六	
九五	九六	一六	
九六	九七	一六	
九七	九八	一六	
九八	九九	一六	
九九	一〇〇	一六	

明治廿五年九月廿二日印刷落成
明治廿五年全月全日出版御届
一定價八錢五厘

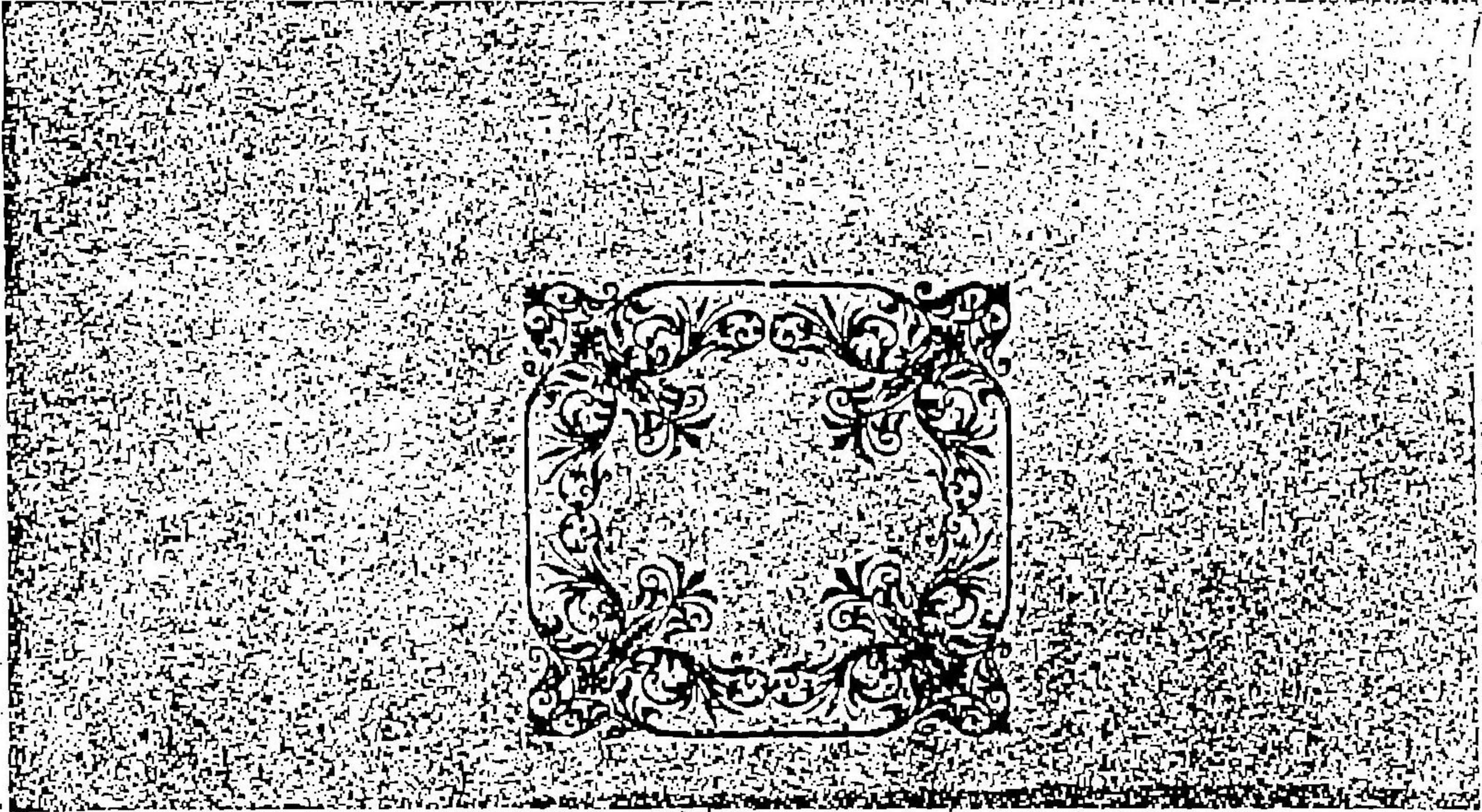
兼發行名 兵庫縣平民 片岡三千次

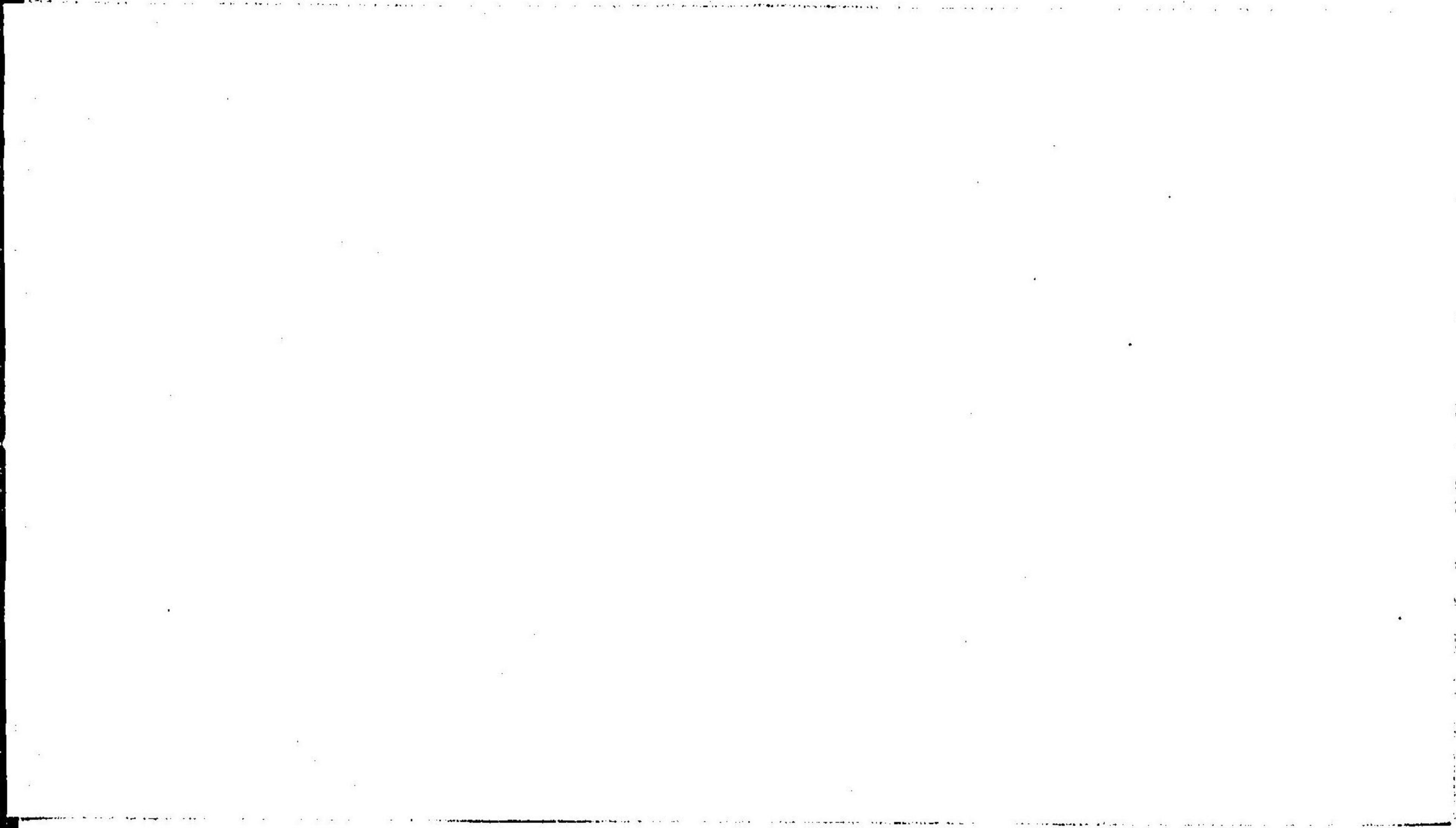
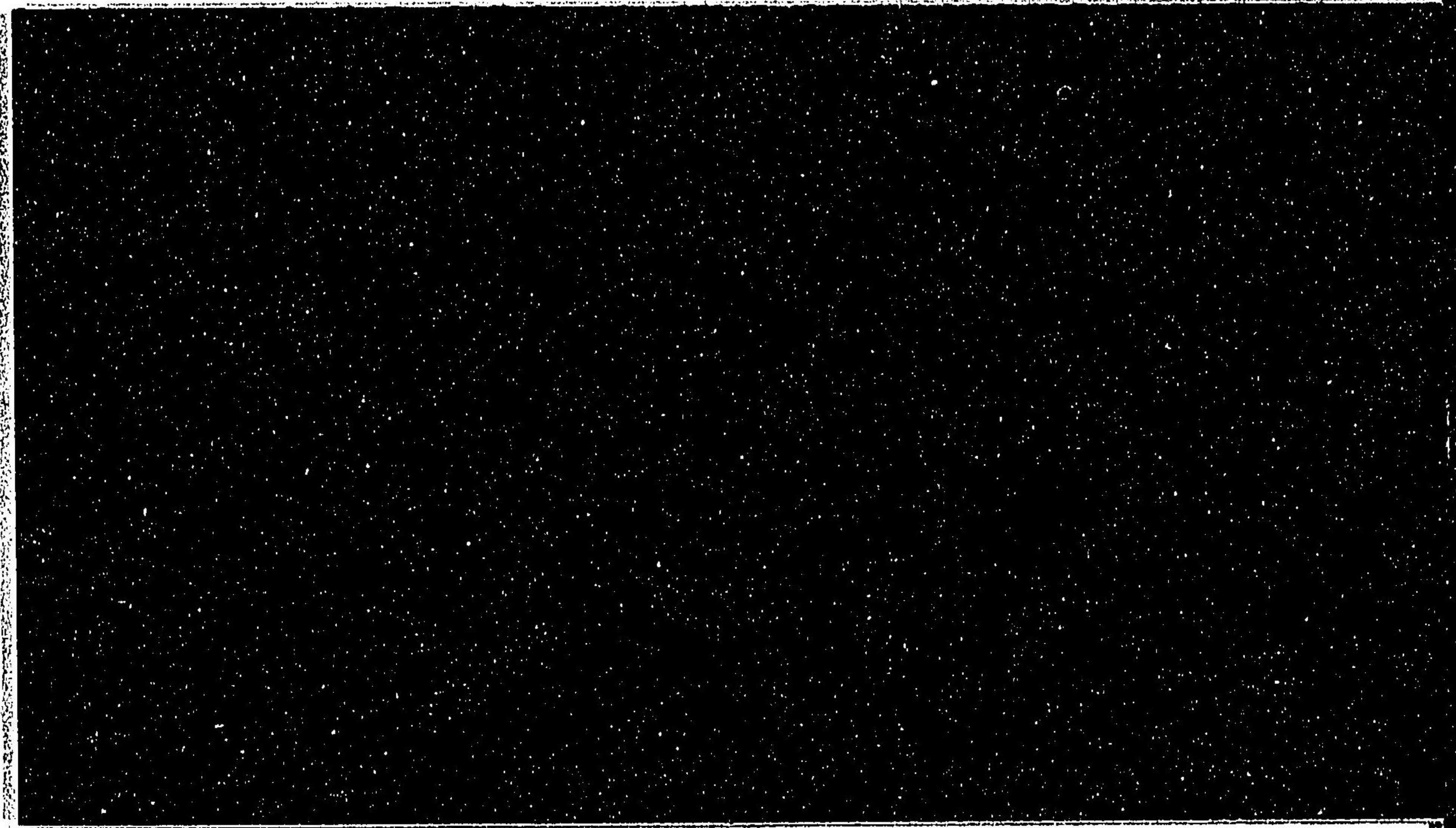
印刷者 兵庫縣士族 奥平芳太郎

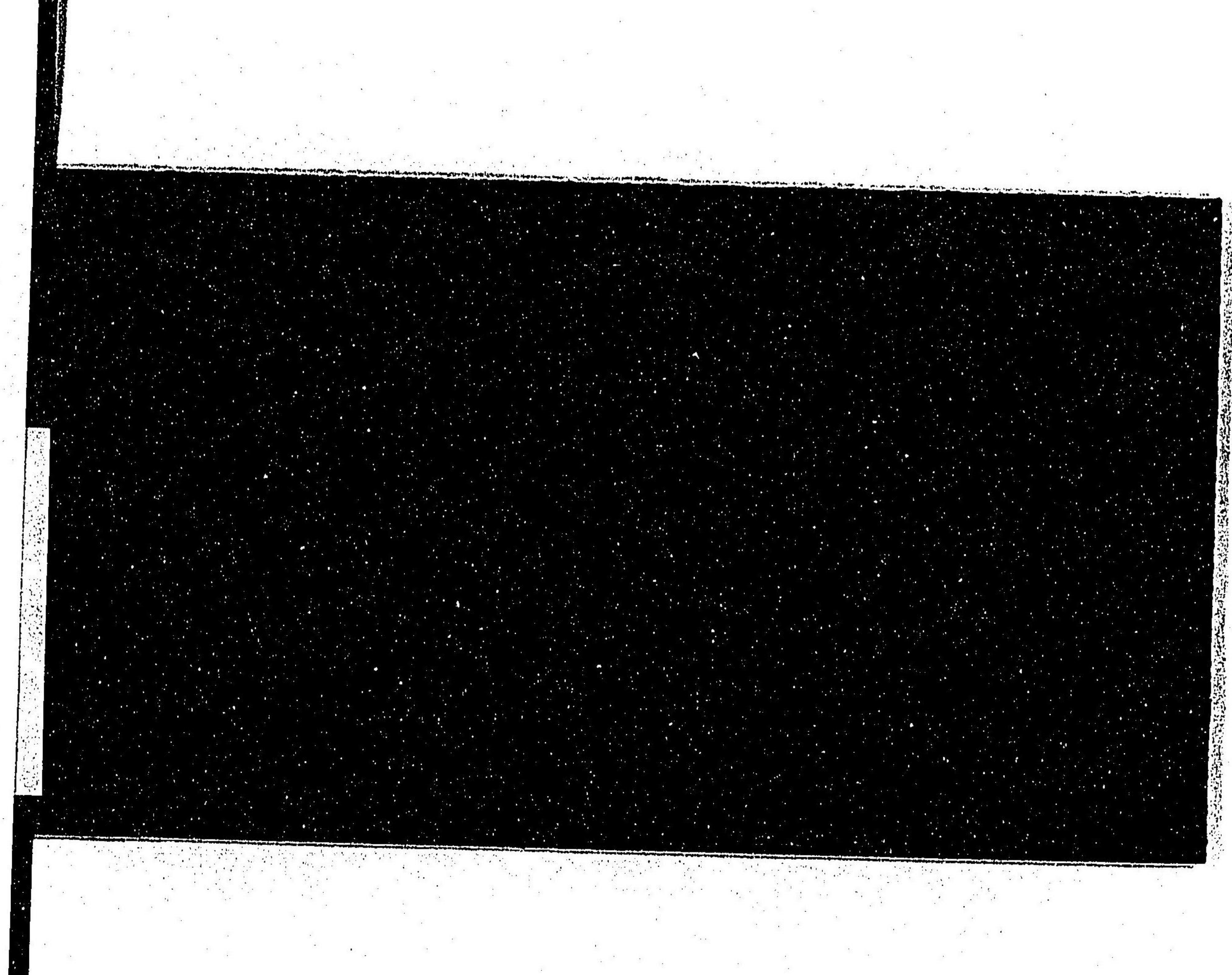
姫路市下寺町表十一番地

販賣本店 朝 榮 舍

販賣各地 書 林







姫路新繁昌記

国立国会図書館

特48

891

025954-000-3

特48-891

姫路新繁昌記

片岡 三千次(凌雲) / 著

M25

ADC-3540

